

基発第0209001号

平成18年2月9日

都道府県労働局長 殿

厚生労働省労働基準局長

(公印省略)

石綿による疾病の認定基準について

標記については、平成15年9月19日付け基発第0919001号（以下「15年通達」という。）により指示してきたところであるが、今般、「石綿による健康被害に係る医学的判断に関する検討会」の検討結果を踏まえ、下記のとおり認定基準を改正したので、今後の取扱いに遺漏のないよう万全を期されたい。

なお、本通達の施行に伴い、15年通達は廃止する。

記

第1 石綿による疾病と石綿ばく露作業

1 石綿による疾病

石綿との関連が明らかな疾病としては、次のものがある。

- (1) 石綿肺
- (2) 肺がん
- (3) 中皮腫
- (4) 良性石綿胸水
- (5) びまん性胸膜肥厚

2 石綿ばく露作業

石綿ばく露作業とは、次に掲げる作業をいう。

- (1) 石綿鉱山又はその附属施設において行う石綿を含有する鉱石又は岩石の採掘、搬出又は粉砕その他石綿の精製に関連する作業
- (2) 倉庫内等における石綿原料等の袋詰め又は運搬作業

- (3) 次のアからオまでに掲げる石綿製品の製造工程における作業
- ア 石綿糸、石綿布等の石綿紡織製品
 - イ 石綿セメント又はこれを原料として製造される石綿スレート、石綿高圧管、石綿円筒等のセメント製品
 - ウ ボイラーの被覆、船舶用隔壁のライニング、内燃機関のジョイントシーリング、ガスケット（パッキング）等に用いられる耐熱性石綿製品
 - エ 自動車、捲揚機等のブレーキライニング等の耐摩耗性石綿製品
 - オ 電気絶縁性、保温性、耐酸性等の性質を有する石綿紙、石綿フェルト等の石綿製品（電線絶縁紙、保温材、耐酸建材等に用いられている。）又は電解隔膜、タイル、プラスター等の充填剤、塗料等の石綿を含有する製品
- (4) 石綿の吹付け作業
- (5) 耐熱性の石綿製品を用いて行う断熱若しくは保温のための被覆又はその補修作業
- (6) 石綿製品の切断等の加工作業
- (7) 石綿製品が被覆材又は建材として用いられている建物、その附属施設等の補修又は解体作業
- (8) 石綿製品が用いられている船舶又は車両の補修又は解体作業
- (9) 石綿を不純物として含有する鉱物（タルク（滑石）等）等の取扱い作業
- (10) 上記(1)から(9)までに掲げるもののほか、これらの作業と同程度以上に石綿粉じんのばく露を受ける作業
- (11) 上記(1)から(10)の作業の周辺等において、間接的なばく露を受ける作業

第2 石綿による疾病の取扱い

1 石綿肺（石綿肺合併症を含む。）

石綿ばく露作業（前記第1の2の(1)から(11)までに掲げる作業をいう。以下同じ。）に従事しているか又は従事したことのある労働者（以下「石綿ばく露労働者」という。）に発生した疾病であって、じん肺法（昭和35年法律第30号）第4条第2項に規定するじん肺管理区分が管理4に該当する石綿肺又は石綿肺に合併したじん肺法施行規則（昭和35年労働省令第6号）第1条第1号から第5号までに掲げる疾病（じん肺管理区分が管理4の者に合併した場合を含む。）は、労働基準法施行規則（昭和22年厚生省令第23号）別

表第1の2（以下「別表第1の2」という。）第5号に該当する業務上の疾病として取り扱うこと。

2 肺がん

- (1) 石綿ばく露労働者に発症した原発性肺がんであって、次のア又はイに該当する場合には、別表第1の2第7号7に該当する業務上の疾病として取り扱うこと。

ア じん肺法に定める胸部エックス線写真の像が第1型以上である石綿肺の所見が得られていること。

イ 次の(ア)又は(イ)の医学的所見が得られ、かつ、石綿ばく露作業への従事期間が10年以上あること。ただし、次の(イ)に掲げる医学的所見が得られたもののうち、肺内の石綿小体又は石綿繊維が一定量以上（乾燥肺重量1g当たり5000本以上の石綿小体若しくは200万本以上（5 μ m超。2 μ m超の場合は500万本以上）の石綿繊維又は気管支肺胞洗浄液1ml中5本以上の石綿小体）認められたものは、石綿ばく露作業への従事期間が10年に満たなくとも、本要件を満たすものとして取り扱うこと。

(ア) 胸部エックス線検査、胸部CT検査等により、胸膜プラーク（胸膜肥厚斑）が認められること。

(イ) 肺内に石綿小体又は石綿繊維が認められること。

- (2) 石綿ばく露作業への従事期間が10年に満たない事案であっても、上記(1)のイの(ア)又は(イ)に掲げる医学的所見が得られているものについては、本省に協議すること。

3 中皮腫

- (1) 石綿ばく露労働者に発症した胸膜、腹膜、心膜又は精巣鞘膜の中皮腫であって、次のア又はイに該当する場合には、別表第1の2第7号7に該当する業務上の疾病として取り扱うこと。

ア じん肺法に定める胸部エックス線写真の像が第1型以上である石綿肺の所見が得られていること。

イ 石綿ばく露作業への従事期間が1年以上あること。

- (2) 上記(1)に該当しない中皮腫の事案については、本省に協議すること。

4 良性石綿胸水

石綿ばく露労働者に発症した良性石綿胸水については、石綿ばく露作業の内容及び従事歴、医学的所見、療養の内容等を調査の上、本省に協議すること。

5 びまん性胸膜肥厚

(1) 石綿ばく露労働者に発症したびまん性胸膜肥厚であって、次のア及びイのいずれの要件にも該当する場合には、別表第1の2第4号8に該当する業務上の疾病として取り扱うこと。

ア 胸部エックス線写真で、肥厚の厚さについては、最も厚いところが5 mm以上あり、広がりについては、片側にのみ肥厚がある場合は側胸壁の1/2以上、両側に肥厚がある場合は側胸壁の1/4以上あるものであって、著しい肺機能障害を伴うこと。

イ 石綿ばく露作業への従事期間が3年以上あること。

(2) 上記(1)のアの要件に該当するものであって、かつ、イの要件に該当しないびまん性胸膜肥厚の事案については、本省に協議すること。

第3 認定に当たっての留意事項

1 中皮腫について

中皮腫は診断が困難な疾病であるため、臨床所見、臨床検査結果だけでなく、病理組織検査に基づく確定診断がなされることが重要である。また、確定診断に当たっては、肺がん、その他のがん、結核性胸膜炎、その他の炎症性胸水、などとの鑑別も必要となる。

このため、中皮腫の業務上外の判断に当たっては、病理組織検査記録等を収集し、確定診断がなされているか確認すること。

なお、病理組織検査が行われていない事案については、臨床所見、臨床経過、臨床検査結果、他疾患との鑑別の根拠等を確認すること。

2 びまん性胸膜肥厚について

ア びまん性胸膜肥厚は石綿ばく露に起因するものの他、関節リウマチ等の膠原病に合併したもの、薬剤によるもの、感染によるもの等石綿ばく露と無関係なものもある。

このため、びまん性胸膜肥厚の業務上外の判断に当たっては、その診断根拠となった臨床所見、臨床経過、臨床検査結果等の資料を収集し、石綿によるとの診断が適正になされていることを確認すること。

イ びまん性胸膜肥厚が業務上疾病として療養の対象となる要件として、上記第2の5の(1)のアで「著しい肺機能障害を伴うこと」としたが、これは、じん肺法第4条でいう「著しい肺機能障害」と同様であること。

石綿関連疾患に係る認定基準

(1) 中皮腫認定の拡大

□ 旧認定基準

- 中皮腫の診断
 - 1型以上の石綿肺所見
- 又は
- 中皮腫の診断
 - 医学的所見(胸膜プラーク、石綿小体、石綿繊維)
 - 1年以上の石綿ばく露作業歴

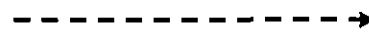
□ 改正認定基準

- 中皮腫の確定診断
 - 1型以上の石綿肺所見
- 又は
- 中皮腫の確定診断
 - 1年以上の石綿ばく露作業歴

(2) 肺がん認定要件の追加

□ 旧認定基準

- 原発性肺がんの診断
 - 1型以上の石綿肺所見
- 又は
- 原発性肺がんの診断
 - 医学的所見(胸膜プラーク、石綿小体、石綿繊維)
 - 10年以上の石綿ばく露作業歴



追加

□ 改正認定基準

- 原発性肺がんの診断
 - 1型以上の石綿肺所見
 - BALF5本/ml
 - 5000本/g(200万f/g)
- 又は
- 原発性肺がんの診断
 - 医学的所見(胸膜プラーク、石綿小体、石綿繊維)
 - 10年以上の石綿ばく露作業歴

(3) びまん性胸膜肥厚の認定基準の策定

□ 旧認定基準

- 本省協議により、個別に判断

□ 改正認定基準

- 胸部エックス線写真で、肥厚の厚さについては最も厚いところで5mm以上、広がりについては、片側の場合は側胸壁の1/2以上、両側の場合は側胸壁の1/4以上であって、著しい肺機能障害を伴うもの
- 石綿ばく露作業への従事期間が3年以上認められるもの

平成18年2月7日

「石綿による健康被害に係る医学的判断に関する考え方」報告書

概 要

1 中皮腫について

- (1) 中皮腫は、そのほとんどが石綿に起因するものと考えられ、中皮腫の診断の確かさが担保されれば石綿を原因とするものと考えられる。
- (2) 職業ばく露によるものとみなせるのは、概ね1年以上の石綿ばく露作業歴が認められた場合である。
- (3) 近隣ばく露や家庭内ばく露による発症も考えられる。
- (4) 中皮腫は、潜伏期間の長い、予後の非常に悪い疾患である。

2 肺がんについて

- (1) 肺がんは喫煙をはじめとしてさまざまな原因が指摘されている中で、石綿を原因とするものとみなせるのは、肺がんの発症リスクを2倍以上に高める量の石綿ばく露があった場合とするのが妥当である。
- (2) 肺がん発症リスクが2倍以上となるばく露量の指標は、以下のとおり。
 - ①胸部エックス線写真の像又はCT画像により明らかな胸膜プラークが認められ、かつ、じん肺法に定める胸部エックス線写真の像で第1型以上(1/0以上)と同様の肺線維化所見があり、胸部CT画像においても肺線維化所見が認められた場合
 - ②肺内蓄積石綿線維数が以下のいずれかである場合。
 - ・乾燥肺重量1g当たり石綿小体5000本以上
 - ・乾燥肺重量1g当たり石綿繊維200万本以上(5 μ m超。2 μ m超なら500万本以上)
 - ・気管支肺胞洗浄液(BALF)1ml当たり石綿小体5本以上
 - ③客観的な石綿ばく露作業従事歴がある者に石綿肺の所見が認められた場合
 - ④胸膜プラーク等の石綿ばく露所見が認められ、石綿ばく露作業に概ね10年以上従事したことが確認された場合
- (3) 肺がんは、潜伏期間の長い、一般に予後の非常に悪い疾患である。

3 石綿肺について

- (1) 石綿肺は、代表的な職業病である。石綿ばく露歴の客観的な情報がなければ、他の原因による肺線維症と区別して石綿肺と診断することは難しい。
- (2) ばく露後すぐ発症するというものではなく、概ね10年以上経過して所見が現れる。
- (3) 肺がん、中皮腫に比べ、予後不良とはいえない。
- (4) 一般環境での発症例の報告はなく、今後の発生状況等について、知見の収集に努めるべきである。

4 良性石綿胸水について

- (1) 良性石綿胸水の診断は困難で、また、確定診断までに相当時間を要する。胸水は、石綿以外のさまざまな原因があり、石綿ばく露歴の客観的な情報がなければ、他の原因による胸水と区別して良性石綿胸水と診断することは難しい。
- (2) 潜伏期間は、他の石綿関連疾患より短く、肺がん、中皮腫に比べ、予後不良とはいえない。
- (3) 一般環境における発症例の報告はなく、また、疫学的知見等も少ない。今後の発生状況等について、知見の収集に努めるべきである。

5 びまん性胸膜肥厚について

- (1) びまん性胸膜肥厚は、石綿以外のさまざまな原因があり、石綿ばく露歴の客観的な情報がなければ、他の原因によるびまん性胸膜肥厚と区別して石綿によるびまん性胸膜肥厚であると判断することは難しい。
- (2) 職業ばく露によるものとみなせるのは、概ね3年以上の石綿ばく露作業歴が認められた場合である。
- (3) 肺がん、中皮腫に比べ、予後不良とはいえない。
- (4) 一般環境における発症例の報告はなく、また、疫学的知見等も少ない。今後の発生状況等について、知見の収集に努めるべきである。

6 医療機関への周知

石綿関連疾患の診断、労災補償上の取り扱い、救済の取り扱いについて、特に、医療機関、及び医療関係者等への周知徹底を図ることが肝要である。